

# AFTERNOON TEA

生理学研究所生殖・内分泌系発達機構研究部門

志内 哲也

## 研究スポーツ

大分大学の森島さんからバトンを引き継ぎました、生理学研究所、生殖・内分泌系発達機構研究部門の志内哲也と申します。森島さんとは故郷の徳島で水泳をやっていた仲間と言うことで、バトンのないリレーを引き継いだ感じです。チャボン。あまりに文才がないため、普段着の文章になりますので、脳内をお休みモードにシフトして、つまみ食い程度にご賞味くださいませ。

私は現在、視床下部—交感神経系を介したエネルギー代謝調節の様々なメカニズムについて研究しています。また、運動時やトレーニングによるエネルギー代謝調節の変化に対して視床下部—交感神経系がどのように関与するのかについても興味を持っています。

だからというわけではないのですが、私の趣味の一つに「スポーツ観戦」があります。スポーツは観るのもするのも好きですが、子供が生まれてからはもっぱら観る専門になってしまいました。しかし、これが意外と楽しく、最近では試合のテレビ中継時間によって実験スケジュールを立てているほどです。ボスには内緒ですが(^^)。もちろん、スポーツニュースはハシゴしてます(相方である妻は呆れますけど(>\_<))。スポーツ観戦は試合のみならず、それ以外の部分を観ることで成り立つのではないかと考えています。たとえばスポーツニュースや新聞、ネットでの報道のされ方や様々な批評を見ると、同じ結果に対していろいろなとらえ方があるモノだと考えさせられます。また、現地に観戦に行った場合は試合そのものだけでなく、試合前後の選手がどんな事をしているのか、練習方法やクセ、選手や監督の性格などが気になります。もっと言えば、その選手のスポンサーやチームの雰囲気などを探ったりすると、観

戦時の考え方が増えて楽しくなりますね。最近は八百長や過度な取材方法、裏金の問題など、黒い部分も見え隠れしていますが、終わったことは仕方がないので、反省するところは反省して頂き、今後はそれをネタにするぐらいのポジティブ思考でスポーツ界を盛り上げてほしいと思います。

このような感覚でスポーツ観戦をしていると、研究とスポーツは似ているなという気がしてきました。自分たちのパフォーマンスを発揮する試合という場が、自分のデータや考えを発表する論文や学会の場とダブリ、日頃からコツコツと積み重ねてきた練習が、毎日悪戦苦闘している実験や勉強に共通するよう見えます。また、試合結果の受け取り方が一つではなく多岐にわたることも、論文や学会発表に対する評価に相当します。現地の学会会場などで著名な研究者を間近で見たととき、発表データだけでなく、発表方法はどんな感じなのか、実際の実験方法やラボの性格などが気になります。もっと言えば、その研究者と仲の良い企業やラボの雰囲気などが分かると、論文を拝見したときの印象が違った形で見えて楽しくなりますね??? 最近は……。

飲み過ぎ食べ過ぎ言い過ぎには気を付けろと、小学校の担任に言われた気がするので、そろそろ締めたと思います。適度な妄想は大事にしているのですが、妄想が暴走すると危険ですからね。こんなヤツが生理学会の一員なのかと嘆く方もいらっしゃるかもしれませんが、自分を着飾っても仕方ないので、ジャージ姿で勝負してみました。食あたりにご注意ください。

あまり自分の研究については語れませんでした。研究というスポーツを楽しみながら、常に現場を見据えて、現場に還元できる生理学的研究をしたいと思っています。世界陸上女子マラソン銅メダルの結果を伝えるスポーツニュースを見なが

ら、「うん、わかった」と相方の寝言に返事をして、  
閉会の辞とさせていただきます。ご夕食、ありが

とうございました。なお、この文章は一部フィク  
ションです m(\_)\_m

生理学研究所

檜原 康博

## 三河の土と北山杉

日本医科大学の原田嘉夫先生からのバトンタッ  
チでの原稿依頼。何を書いても良いと編集の先生。  
何を書いてもと云う条件下の方が難しいと抵抗。  
どうしようかと戸惑っているときに両親から電  
話。この忙しい際に家を新築したいと云ってきた。  
曰く、「色々ハウスメーカー展示場をみたが、どれ  
も同じに見える。外断熱、内断熱、天然無垢材、  
シロアリ駆除保証というけれど要は規格化された  
工業製品。一体どうしてしまったのだろうか。彼  
らの云う在来工法ではなく、昔ながらの在来工法  
の家が建てられないのかね。」と両親。知る訳ない  
でしょ。こちら専門の下肢運動神経細胞機能発現  
の標的依存性ならちよとは語れるけど。返答に  
困ったので、岡崎の友人に尋ねてみた。彼は、工  
務店を営みながらも美術系大学で教鞭もとる土と  
土蔵の研究者で、土壁を得意としている代々左官  
屋のせがれだ。

「壁は建てる家のまわりにある土を掘って、それ  
を塗る。材木は地元のものを使う。これが基本だ  
よ。」と彼はいう。「昔ながらの材木の使い方をして  
いれば、シロアリ駆除も要らないし、床も暖かい  
んだよね。」「この基本的な了解事項が実はとっ  
くに風化しているところに問題があるんだ。三河  
は、良い土がとれる。だいたい陶器の生産地の近  
辺は良い土が多いのだ。」「昔の民家を建てること  
はしないけど、その方法を取り入れた家をご両親  
に建ててあげても良いよ。」と言ってくれた。これ  
で決まった。

その彼と、お盆の休日に、北山杉で知られた京  
都北山の従弟宅を訪れた。彼の作品に北山杉丸太  
を組み入れてほしいと両親が願っていること、使  
う材料がどういう思いで作られているのかを知り  
たいという彼の思いから、訪問することにしたの

だ。京都市外を北上し、高雄を経て険しい街道を  
登り、トンネルを迂回し、両側に険しい山を見な  
がら川に沿った道をいくと棧橋とともに丸太を取  
納した倉庫がいくつも並んでいる目的の集落にた  
どり着いた。絵画でなく版画が似合う風景だ。

「また、川端康成はんが伯父さんのところに泊  
まってはるんえ。」昔、従姉妹がよく云ってたこと  
を思い出した。川端康成氏がこの一族の家に何度  
も泊めてもらって執筆し、「古都」という小説を書  
いたということを知り頃聞いたことがある。実際、  
鯉氏が「後年、ノーベル文学賞の授章式で「美  
しい日本の私」を講演するが、そのころ川端は「い  
にしえの山河」「日本の伝統美」に思いを深めてい  
た。とりわけ京都の風物に心惹かれ、しばしば訪  
れた北山の里でひとときの安らぎを得ていたとい  
う。」と紹介されている。もしかして、双子の姉妹  
のモデルは若かりし日の伯母さんなのかな。それ  
は、ないか。そんな思いを巡らしながら、従弟宅  
に着いた。

「今出荷している主な丸太は、先代が植えたもの  
だ。僕も次の世代のために苗を植えている。何と  
も気の長い作業で、先行投資のかかるリスクの多  
い仕事なのだ。」そういって、従兄弟も何百年から  
の伝統をもつ技術家の顔になって三河の左官屋と  
議論していた。多くは理解できなかったが、どう  
やらそこは職人同士か、お互い共感するところ  
が多いように見えた。これで引き合わせ成功だ。あ  
とは、三河の土と北山杉で両親のために良い家を  
造ってください。

その後、近くの北山資料館に行った。そもそも  
数寄屋普請とはどういうもので、床柱はどういう  
ものか、と日本の伝統的な民家の基本が紹介され  
ていた。川端氏の時代はこういう了解事項が喪失  
してゆく過程にあり、そして今は、それが悉く風  
化してしまった時代なのだろう。それにこだわり

続ける限り、その啓蒙を身銭を切ってやらざるを得ない状況、それが現在なのだ。そういえば、三河の左官屋も、「山寿荘」という名の土壁をふんだんに使った民家をつくって、市民にいろんな催しのために開放している。この山寿荘と云う名は、あまり知られていないが、実は生理学研究所時代の江橋節郎先生が命名されたものだ。江橋先生は、岡崎の人々にも大変人気があったので、ごく気軽に引き受けられたのだろうとずっと思っていた。しかし、江橋先生はこの山寿荘にしばしば来られ、岡崎で知り合われた友人達と会話を楽しまれていたということである。この山寿荘も、要は、日本民家の土壁技術の啓蒙活動であり、失われた了解事項を理解する人の裾野を広げたいためなのだ。そのもしかしてドンキホーテ的となるかもしれな

い試み、そこに江橋先生は、共感なされてのことだったのではないだろうか。今になってそう思う。

北山杉の職人も三河の左官屋も、本来根付いているはずの了解事項が風化してしまった時代だからこそ、その復権に個人レベルで身銭を切ってやらざるを得ないのだ。その地平の彼方にしか川端康成の「美しい日本」が見えないとすると、それは何とも遠い、険しい道だ。

帰りにのせてくれた4輪駆動の中で、従兄弟は「せやし、僕はいつもこれで空をみているんや。」とつぶやいた。それくらい急な坂を4輪駆動で登って山で作業するという意味なのだが、私には、伝統技能を次の世代に必ず継承させ、育てるという決意に聞こえた。

奈良県立医科大学第二生理学教室

坂田 進

## 上月久治先生を偲んで

県立広島大学の福場良之先生が姫路獨協大学の上月久治先生にバトンを渡されたのですが、その直後の6月8日早朝に上月先生は心筋梗塞の為、ご逝去されました。享年51歳でありました。上月先生と私は、奈良県立医科大学第二生理学教室で22年間同僚であった仲により、急遽代役として私がバトンを受け継ぎ、このAFTERNOON TEAに上月先生の追悼文を書くことになりました（この経緯は下記に記載されています）。

1955年に姫路で生まれた上月先生は、兵庫県立姫路西高等学校を卒業され、すぐに奈良県立医科大学に進学されました。高等学校では水泳部、大学では剣道部に所属され、キャプテンとして大いに活躍されました。当時の奈良医大では、全国的な大学紛争の余波を受け、まだ紛争がくすぶっており、いやでも大学の自治に関わらざるをえない状況でした。先生もまじめなお人柄の故、紛争解決に真剣に取り組まれたようです。卒後（1980年）、榎 泰義名誉教授主宰の第二生理学教室の院生になられたのは、生理学に興味があったことに

加えて、この混乱期に榎先生のお人柄に触れ、榎先生を慕ったからでした。

同時期に入室した私たちは、同じ部屋で机を並べることになりました。その当時から、先生の机上と本棚は、いつもきれいに整理整頓されていま



した。誠に几帳面なきれいな好きな先生でした。また、先生は実験器具や棚を自身で作製されました。この「手先の器用さ」と「几帳面さ」により、骨格筋と心筋で酸素消費量を測定するという難しい研究が成し遂げられたのです。実験は朝から深夜に及びましたが、一日中もくもくと実験をされ、特に、長年病床にあったお母様がお亡くなりになった後、一層研究に打ち込まれました。1984年に「末梢組織への酸素輸送におよぼす血液酸素親和性変化の影響について I. イヌ安静時骨格筋 (M. Gracilis)」の論文で医学博士を取得されました。この研究において、血液酸素解離曲線作成と  $P_{50}$  の測定に関して簡便な方法を開発し、さらに、血液酸素親和性変化が筋組織への酸素輸送に及ぼす生理的意義を明らかにするため、人為的に酸素親和性を変えた血液をイヌ骨格筋に灌流し、筋の酸素摂取量等を測定しました。その後、助手、講師になられ、この研究を一層発展され、「生体の酸素摂取量は、血流量依存性の酸素摂取量によって制限される成分と拡散依存性の酸素供給量によって制限される成分から構成される」という2成分仮説を提出されました。これらの一連の研究論文は、Jpn J Physiol をはじめ、J Appl Physiol, Exp Physiol, Resp Physiol, Clin Exp Pharm Physiol, 等の生理学雑誌に掲載されました。当時、教室では抄読会が毎月曜日の6時から開催されましたが、抄読会終了後、一月に1~2回は飲み会へと変貌しました。酔いが回ってくると、上月先生と榎先生の議論が始まり、白熱すると議論が深夜まで及ぶこともしばしばありました。40歳の時に撮影されたこの写真は、先生の温厚なお人柄が偲ばれる一枚です。

1996年3月に榎先生が退官され、その年の11月に岡山から高木 都教授が赴任されました。それに伴い、上月先生は、ラット心筋スライスの酸素消費量を測定する研究に取り組み、数編の論文が Am J Physiol Heart Circ Physiol 等に掲載されました。また、同時にイヌ骨格筋の血液灌流実験の論文数編を精力的にまとめられました。2002年に高木先生の推挙により先生は岡山学院大学人間生活学部へ教授として栄転されました。さらに、

2006年には姫路獨協大学医療保健学部理学療法学科主任教授になられました。岡山に移られた直後から岡山大学システム循環生理学教室の梶谷文彦前教授のもとで、姫路獨協大学藤野英己教授と一緒に骨格筋の微小循環の研究を始められ、数編の論文が J Appl Physiol 等に掲載されました。このように、先生は新しい研究に次々と挑戦され、その度に熱心に且つ真摯に取り組み、数々の重要な発見をされました。また、学科主任教授として教育や大学運営にも極めて熱心に取り組み、教職員や学生から高い信頼を得たと聞き及んでいます。まだまだ、これからという時機に奥様と3人の息子さんを残されて旅立たれてしまわれ、本当に残念無念でなりません。生涯清廉潔白な学究の士であられた先生のお人柄を偲び、ここに謹んで先生のご冥福をお祈り申し上げます。最後に、1998年に奈良医大で講演された Johannes Piiper 先生から福場先生に送られたお悔やみと先生の御略歴を紹介します。

合掌

Johannes Piiper 先生のお悔やみ

Dear Dr. Yoshiyuki Fukuba,

It was a shock to learn about the unexpected passing away of Dr. Hisaharu Kohzuki.

At several conferences we had lively discussions on his interesting original models of oxygen transfer in exercising muscle. He invited me to Nara where I gave a talk. He showed his laboratory and his most recent experimental results. I was particularly impressed by his expert knowledge of the rich art heritage of the Nara and Kyoto areas.

He showed and explained to me.

I deeply deplore the loss of a good scientist and amiable colleague.

Sincerely

Johannes Piiper

P.S. I am sorry for the delay in receiving your message due to my being out of town

上月久治先生 御略歴

1955年10月30日 姫路市に生まれる  
1974年3月 兵庫県立姫路西高等学校卒業  
1980年3月 奈良県立医科大学医学部卒業  
1980年5月 第69回医師国家試験合格  
1984年3月 奈良県立医科大学大学院修了  
医学博士の学位を取得  
1984年4月 奈良県立医科大学第二生理学教室 助手  
1986年4月 奈良県立医科大学第二生理学教室 講師  
2002年4月 岡山学院大学人間生活学部食物栄養学科 教授  
2006年4月 姫路獨協大学医療保健学部理学療法学科 学科主任教授

2007年6月8日 心筋梗塞のため逝去

第69巻11号でお伝え致しましたように、第56回 Afternoon Tea ご執筆予定であられた姫路獨協大学教授・上月久治先生は2007年6月8日に急逝されました。ご遺族やご同僚であられた姫路獨協大学・藤野英己教授にお願いしてご遺稿を探しましたが、残念ながら見つけることが出来ませんでした。藤野先生、又、上月先生に Afternoon Tea のバトンを渡された県立広島大学・福場良之先生ともご相談して、上月先生と長く同僚であられた奈良県立医科大学・第二生理学講座・坂田進先生に上月先生を偲ぶ文をご執筆頂きました。今後坂田先生からバトンを渡す形で Afternoon Tea を進めたいと存じます。

改めまして、上月久治先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

日本生理学雑誌編集委員会